

武道の「武」の字は、戈（ほこ）と止の合字です。「止」は歩む意で、足首全体の象形です。そこから、「武」は戈を背負って一步前へ進む、という意味となるのです。これは、漢字学で有名な白川静博士によって解明されました。

しばらくの間、「武」は戈と止の合字で、戈を止める、つまり軍備力（戈）で戦争を未然に防ぎ止める意とされてきました。実はこの誤解は古くからあり、『春秋左氏伝』にこの解釈が出ています。この本は中国の戦国時代、紀元前 8 世紀から紀元前 3 世紀頃に書かれたものではないかと言われていました。漢字の生まれた中国でも、象形文字として成立してから時が経って、その字の成り立ちが分からなくなっていたのです。これが第二次大戦に負けた日本では受け入れられ武道界でも力説された時がありましたが、これは白川博士によって明確に否定されたのです。

「戈を背負って前へ」ということは、戦う覚悟を決めることです。むやみに戦いを好むのはまた別の話ですが、やむに已まれず覚悟を決めるというのは、命に代えても守りたいもの侵されたくないことがあるからでしょう。そのような時、躊躇することなく勇気をもって果敢に前へ進めるよう常日頃修練しよう、というのが武道の「武」の意味でしょう。

弓道では、最高目標として「真・善・美」を掲げています。それぞれは哲学・論理学・倫理学などの命題としても難しい課題ですが、難しいからこそ弓を引き続けて体で納得していくこと、つまり体得を求められているのではないのでしょうか。このなかで「真」と「善」は価値観を自分の中に求めていかなければいけません。他人から「こうだ!」といわれてそれに従うのではなく、主体的に求めていかなければいけません。ところが「美」は、「自分の射は美だ!」と自分で主張するわけにはいかず、客観的な評価となるのです。「真・善・美」というのはこのように絶妙なバランスの価値観と言っていいでしょう。修練してきた「真」や「善」が射業として表われたとき、迫真力や高潔性となって評価されることが「美」つまりはその射手の存在感、つまりは一個の人間としての調和美となり、そこに射手に対する共感や信頼感が醸成されることでしょう。だからこそ、射手には誠意が求められ、射を受ける者にも射手の誠を受け取る誠意が必要となるのです。「至誠」の精神です。

対象物を動かない的と定めたところから、弓道は定まり難い自己の探求に向かい始めたといっているでしょう。教本の求める「厳しい自己統制と情緒の安定」のもと、「真・善・美」という難しい概念に挑む勇気・勇猛心こそ、「武」という果敢に前へ踏み出す精神なのです。

新型コロナウイルスの国内感染防止のために全国に発出された緊急事態宣言も、この 25 日の首都圏や北海道への解除宣言を最後として一応の終息となりました。このウイルスは、私たちのこれまでの日常を一変させるような力を持っていました。弓道を修練する者としても、今まで通りとはいかなくなることも考えられます。しかし、その昔から営々と続けられてきた弓道を足許から見直すことで、弓道の「新しい日常」も出来てくるのではないのでしょうか。